

ソシオロジ 第五一巻一号 抜刷
二〇〇六年五月 社会学研究会

● DOING SOCIOLOGY

「弱者の抵抗」の非個人能力主義的解釈

——論理的達成と会話的達成——

榎田 美雄

「弱者の抵抗」の非個人能力主義的解釈

——論理的達成と会話的達成——

樫田美雄

この原稿では、特定の場面で「依頼する立場」から「依頼される立場」への逆転現象があったからといって、そこから、当事者の一方の能力（論理性等）の高さを個人能力主義的意味において、帰結するのは不適である、ということを経験メソドロジの立場に立つてあきらかにしつつ、そのような探究の中に、社会学をすること（Doing Sociology）の喜びがあるということまで述べていきたい。

一 「弱者の抵抗」現象をどう理解すべきか——エスノメソドロジの課題

場面の特徴はその場その場で達成されているので、現実の場面のなかでレリバント（適切）なものになっている文脈が

ひよんなことから変化してしまうことがある。場面のこのような「展開可能性」ゆえに、相互行為上の「弱者」が「強者」になるようなことも生じうる。たとえば、「依頼・受諾」関係にあるA・B兩人が、「受諾・依頼」関係に転回するようなことはかなり簡単に生じうる。これらの現象は、常識破壊を志向したものである通常の社会学（アイロニーの社会学）の観点からみると、たいへんに興味深い現象であるといえよう。

あるいは、逆転現象とまでいかななくても、弱者が強者に拮抗して見えることがある。「弱者」であっても「身体を賭けて抵抗すること」、「ことばや視線を使って誇り・矜持を示すこと」が可能であるかのようにみえることがある。

けれども、このような興味深い目立った事象が観察できるからといって、それに対して個人能力主義的な理解をすることは不適当ではないか、と思っている。すなわち、「人というものは社会条件上かなり恵まれていなくても、誇りを持って生きることが可能な程度には十分なコミュニケーション能力をもっている」とか、「劣位の間人であっても肉体をもっている以上、それを用いて最低限の権利を主張することが可能なのであって、それゆえ優位者と拮抗して生きることが可能な存在者である」とかいうことは、たとえそれが妥当であるとしても、すくなくとも、それを事象に基づいていうことにおいては十分に慎重でなければならな

いのではないか、と思つている。エスノメソドロロジーの研究は、上記のような物言いに荷担してきた過去があると思う。しかし、最近になつて思うのだが、もしそのようなエスノメソドロロジー研究をしてきてしまつていたのなら、それは、通常社会学に存在するのと同様の危険な問題関心（現実には信じられた通りではないはずだというアイロニカルな視線、弱者の有能さを羨望する社会学的ロマンチズム等々）が我々の研究の中に紛れ込んでしまつていたからではなかつたかと思つている。今回の論考では、自戒を込めて、「そのような粉飾された研究をしなくても、エスノメソドロロジー研究は十分に面白い」と主張したい。

二 「弱者の抵抗」現象としての「みい切つてよっちゅうのみにみい切らんの」

私はよく指先に救急絆創膏を貼つている。爪の切り方が下手なのだろう。ワープロのキーを叩くのに困らない程度まで爪を切る必要があつて、四〜五日に一回爪切りを使うのだが、しばしば切りすぎてしまう。何年たつても、何歳になつてもうまくならない。爪を切つた直後はなんとかくつついていても、肉（身）のそばぎりぎりまで爪を短くしてしまふと力のかかり具合によつては、三〇分もすると爪と爪の下の身との間が割れてきて、爪の下に隙間ができてしまふのである。そこに水がしみるととても痛い。だから、救急絆創膏を貼つて

割れ目がくつつくように促している。

ある日学生が、養護老人ホームにビデオカメラを担いでいつて卒論の調査をしてきた。その中に、「お風呂待ちの間に、職員に爪を切つてもらおうおばあさん」の場面があつた。上記のような個人的事情があるので、「施設で職員に爪を切つてもらおう入所者」の話は、私の緊張感を高めた。爪の下の肉を切つてしまうこともあるんじゃないだろうか。肉が切れてしまつたおばあちゃんは文句を言えるんだらうか？などと考えながら、一緒にデータをみてみると、驚いたことに、画面の中には「みい切つてよっちゅうのみにみいきらんの（肉を切つてもよいというのに肉をきらないのか…西日本のある地域の方言）」と職員を煽るおばあちゃんがいたのである【会話場面①②③※いずれも（林、二〇〇六）より改変して収録。トランスクリプト記号については末尾に掲載】。

【会話場面① 2005.9.8 AM9:56:23〜】（A…入浴待ちの入所者、S…職員）

22 A…みい切つてよっちゅうのみにみい切らんの

23 S…そんなんみい切つてどないすんの、痛いだけや

24 A…いや、血が出るほど

25 S…血が出るほど切つたつてしゃあないでえ…

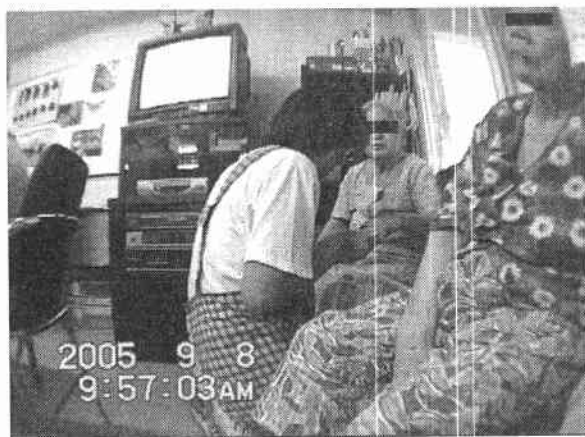
26 A…

たら伸びへんで

|| そし

- 27 S: 伸びるよ、() 伸びてくるの遅いだ
 けや: : hhh
- 28 A: そうかなあ
- 29 S: 回数が減るだけで
- 30 A: 手はなあ、まあまあ、V V自分でするけんよ^ ^あ
 んた忙しいからかんまん、ちよつと一服し
- 31 S: 一服しつてけ? hhh(一服しろっていうのかの意)
- 32 A: ほなつんで、hhhh(爪をつむは爪を切るの意)
- 33 S: まあ今日は暇やからやらして
- 34 A: かんまん? (かまわないか、の方言形)
- 35 S: うん、みんなが出てきたらちよつとストップするな
- 36 A: よっしゃ
- 37 S: Aさんがお風呂行かんかったらな
- 【公話場面② 2005.9.8 AM9:58:26】
- 56 A: 血が出てもええつちゆうん
 ((Sの後を別の入所者のCさんが通る))
- 57 S: ((後を振り返りながら)) いける? Cさん通れ
 る?
- 58 A: 血が出てもええつちゆうん
- 59 S: ((Sは無言で作業を続ける))

23行目、59行目を見れば分かるように、職員Sの側は、入



所者Aの「挑発」には乗ろうとしていない。入所者Aの申し出は、はじめ「痛くなるからだめだ」と反論され(23行目)、のちに「沈黙」によって答えられている(②57、59行目)。ここでの「沈黙」が、「血が出るまで深爪せよ」というAの促しに対する、婉曲な拒否であることに異論はなからう。ではこのように結果として拒絶されるような申し出を、Aはどのような文脈下でなし続けているのだろうか。そのレリバンス(適切性)はどのように調達されているのか。26行目以下のデータをしながら検討を続けていってみよう。

26行目の「そしたら伸びへんで」は、方言の「強調」の終助詞「で」で終了していることで、この過激な発言の「理由」を表しているとみられる

(上野、一九九七:二五)。しかし、これはいったいどのような文脈下で「理由」になっているのだろうか。ここだけでは分からない。そこでさらに続けてトランスクリプトを追っていくと、「血が出るまで深く切ったところで、やっぱり爪は伸びる」(大意)と職員Sに反論されていることが参考

になる。つまり、爪切り作業がなくなるのが、何かSにとって望ましいことであるかのよう「入所者A」によって追求され、そのような願望をAが持っていることは理解されつつも、その願望は叶えられないと職員Sによって否定されているのである。ここでは、少なくとも「入所者A」がそのような願望を持っていることだけは、妥当なこと、あり得ることとして、場面の中で意味理解が共有されている。たとえば、具体的な「入所者A」の希望が叶えられなくても、少なくともAは、自らがそのような願望を持っていることそのものについて、「職員S」に理解をさせることに成功しているのである。では、この願望が意味を持つ文脈はどのようなものなのだろうか。このことについても、会話を追っていくことで我々は見通しを得ることができる。30行目の発話が決定的である。「入所者A」は「手の爪切りは自分でする」「あなたは忙しいからしないで良い」「少し休みなさい」と、「職員S」に休息することを促しているのだ。この文脈こそが、先の結局は「否定」される「申し出」を、適切なものにする文脈なのではないだろうか。それは、第一に、爪を切る際の注意水準の切り下げを許容する申し出であり、第二に、(現実性はないものの)今後の爪切り作業から「職員S」を解放することを志向した申し出であった。その全体は「あなた忙しいからかんまん(構わない、の方言型)」「(30行目)」という「配慮」に基盤を置いた発言だったのである。ここで重要なのは、そ

の「配慮」が「配慮」としては「職員S」に受け入れられていることである。「今日は暇だからやらして」(33行目)という「職員S」の発話はその受け入れを表している。「やらして」という「許諾依頼(決定権を相手が持っていることを表示した依頼)」表現は、第一に「依頼・受け入れ」関係のうちの「依頼」側に職員がなることが(仮構的にはあつても)ここで示しており、さらには、第二に「一服するように、休むように」という「入所者A」からの促しが、やはり同様に、二人の間の相互行為の基盤として受け入れられていることを意味している。このようにして、「入所者A」は、自らの具体的な「提案(身切つて)」そのものは、拒絶されたものの、自らの提案の前提文脈として呈示した「配慮」については、「職員S」に受け入れさせることに成功しているのである。

三 「弱者の抵抗」の非個人能力主義的解釈

しかし、これは、「入所者A」の能力の高さを意味するものなのだろうか。あるいは、「何も持たないものの『身体』を賭けた『矜持』の開陳」(檜田編、二〇〇六・一)といえるのだろうか。そういえるのかも知れない、とは思ふ。けれども、そのような「弱者(入所者)の潜在力」を称揚するまどめをしてしまうことには、外部的な力(社会的ロマンチズム?)が働き過ぎているのではないか、という気もする

のである。思考の次の段階での興奮が予期されてしまうのだ。たとえば、ここでの発話を「入所者A」さんの「能力の高さ」だと考えると、同じAさんの次の発話(③)はどうか解釈したらよいのだろうか。

【会話場面③ 2005.9.8 AM9:57:03～】

40 A: 深爪するんでもええよ

41 S: 深爪したら「い

42 A: 「い、いや血が出てもかんまんつちゅう

の(1.0) 血が出たところからまた伸びてくる

43 S: hahaha 怪我したら痛いんは痛いんよ

44 A: 痛ない

これは、「会話場面①」と「会話場面②」の間での会話である。ここでは、「会話場面①」での「職員S」からの示唆を受けて、「血が出るまで切ったら爪は伸びない」という主張は撤回されている。驚くべきことは、その撤回した後の立場がなお、「血が出るまで切っても構わない」という主張と矛盾しないものとして組み立てられていることである。つまり、「血が出るまで切っても、(爪の成長の素が破壊されるわけではないのだから)」「深爪してもいいのだ」(40行目～42行目)という組み立てで主張がなされるのである。その結果、「注意義務の軽減」というSへの「配慮」は、維持され続け

ることになる。もちろん、だからといって「職員S」が、身を切るわけではない。「hahaha 怪我したら痛いんは痛いんよ」と、笑いながら「入所者A」の「無茶」はたしなめられるのだが、なんとそのやんわりとした「たしなめ」に対して、「入所者A」は、「痛ない」とピシッと答えるのである。

これは、「能力」の高さ、と呼べるようなもののだろうか。そこにあるのは、発話の意味内容の水準での論理の一貫性という観点からは論理を超越した、ほとんどむき出しの「好意」あるいは「配慮」である。このようなむき出しの「好意」「配慮」には我々は当惑してしまう(59行目の沈黙)。会話のシークエンシャルなつながりは、ここでもかなりぎこちないものになってしまっている。その一方で、発話の効果の水準では一貫した達成がなされている。「入所者A」は、「配慮する人」「許諾を与える人」の側に立つことに成功し続けている。なにか「論理的達成」には失敗しているが、「会話的(相互行為的)達成」には成功している、というような表現をするのに適切な現象が起きているように思われるのである。「個人能力主義的」にこの「弱者の抵抗」を解釈するのは不適であるが、「非個人能力主義的」解釈ならばそのようにいってもよいような気がするのである。

四 アイロニーの社会学とエスノメソドロジー

通常社会学を、「アイロニー」で特徴づけたロドニー・ワ

トソン（岡田、一九九六：一七）の議論をエスノメソドロロジーに当てはめるとき、ひとつの解釈として、エスノメソドロロジーは通常社会学に寄生してその価値を高めている、ということが出来る。すなわち、社会は見えたとおりのものとはじつは違う、というアイロニー的常識に対抗するアイロニーとして、

エスノメソドロロジー研究を位置づけることが可能である。つまり、社会的発想の支配下では、エスノメソドロロジー研究のように、「みたままである」というのもアイロニーということになりうるのである。しかし、そのような「位置づけ」だけが、可能な「位置づけ」ではない。社会学を前提とする立場からは、社会学に寄生するポジションをエスノメソドロロジーが取っている、ということになるのだから、エスノメソドロロジーの側からは必ずしもそうはならないだろう。

同様に、この論考で主張してきた「弱者の抵抗」問題も考えることができると思う。「弱者という個人に能力があるように見えること」「それ自体が、ある「成り立ち」の秩序の中での一現象といえるからだ。そもそも、「弱者にも強者に拮抗する能力があるようにみえる」ことそれ自身は現実の中の現実味をもった事実であると認定されてよいことだが、ことさらに研究者がそのことを意味ある「事実」として取り上げることは、「研究上の発見」と「事実」を混同してしまうまちがいを犯していると評価されることになる。別の言い方をすれば、研究上重要なのは、「成り立っていること」の

内容そのものの方ではない。重要なのは、「成り立ち」を支えるメカニズムがどうなっているかということに関してどのような例証がなされたかということの方なのである、というエスノメソドロロジーの見方は、通常社会学の関心からの汚染を免れて存在しうるものなのだと思う。

このように考えているとビデオ撮りした現象をみると、研究上の「感興」を覚えるポイントが少しずつ変化してくることを体験できる。本稿のテーマはこのポイント変化（転回）の意義の確認ということでもあった。「弱者が強者と拮抗している」というような、通常社会的な、アイロニカルな部分にたいしての「オオー」という「感興」から、「不思議な現象と一見して見えるものにもそれを支える当たり前の相互行為上の、会話上の仕組みがある」というエスノメソドロジカルな、静かな了解にともなう「ホー」という「感興」に、面白いと感じられるポイントの質が変化してくるのである。

この後者の「感興」の質的感覚をここでは、「エスノメソドロロジー研究の質感」と呼ぶことにしたい。今回はあまり述べることができなかつたが、この「質感」、すなわち、驚くべきことが驚くべきことというほどではない基盤にもとづいたものとして分析・理解されていくことができる、そういう理解の転回過程にともなう静かな「感興」について、今後はもう少し書いていきたい。この「質感」に関して書かれたも

のは、これまであまり無かったのではないだろうか。けれども、この「質感」こそが「エスノメソドロジー（あるいは、ビデオ分析）」を行う研究者をドライブする、研究実践上の重要な要素になっているのではないだろうか。そういう見通しを私は持っている。我々に研究を続けさせているものは、研究の最終結果の美しさではなく、むしろ、この置き換わりの際の感覚（質感）の心地よさ、腑に落ちる感覚なのではないか、と思うのである。上記ではそういう感じを私に与えてくれた最近のデータとして「老人福祉施設における爪切り場面」をとりあげ、「ビデオを用いて社会学をすること（Doing Video-Sociology）」の記述を行ってきた。今回は素描にとどまってしまうので、より詳細な記述を年内にどこかで行いたいと考えている。

【トランスクリプト記号】

∴∴ コロンの列・直前の音が延ばされていることを示す。

〔 角括弧・参加者たちの発話が重なっていることを示す。

∥ 途切れなく言葉もしくは発話がつながっていることを示す。

() 丸括弧・何か言葉が話されているが、はっきり聞き取れないことを示す。

(数字) 数字の秒数だけ沈黙があることを示す。

() そのつど必要な注記であることを示す。

h h h, h a h a など 笑いなど呼気音を示す。

∨∨……∧∧ ……部の声が小さいことを示す

引用・参考文献

林佑香、二〇〇六「施設内コミュニケーションの相互行為分析―

―身体の意義に注目して」榎田美雄編『生活の中の相互行為

(平成一七年度徳島大学総合科学部榎田ゼミナールゼミ論

集)』三二―三三。

榎田美雄編、二〇〇六『生活の中の相互行為』(徳島県立図書館、

徳島大学図書館所蔵) (<http://www.ias.tokushima-u.ac.jp/social/kasida/jisshuu/2005/2005.html>) PDFファイルを公

開中)。

岡田光弘、一九九六「エスノ・ソシオロジーの誘惑」『年報筑波社

会学』七号・一〇九―一一八。

上野和昭、一九九七「総論・方言の特色」平山輝男編者代表・上

野和昭徳島県編者『徳島県のことば』明治書院・五―一六。

(か) だ よしお・徳島大学総合科学部助教授